

## 高齢者に認められたセメント質骨形成線維腫の一例

富田 真貴<sup>1</sup>, 中山 洋子<sup>1</sup>, 木村 晃大<sup>2</sup>, 安田 浩一<sup>1</sup>, 古澤 清文<sup>1</sup>

<sup>1</sup>松本歯科大学 口腔顎顔面外科学講座

<sup>2</sup>松本歯科大学 口腔病理学講座

A case report of cemento-ossifying fibroma in an elderly person

MAKI SUGIURA-TOMITA<sup>1</sup>, YOKO HASUMI-NAKAYAMA<sup>1</sup>, AKIHIRO KIMURA<sup>2</sup>,  
KOUICHI YASUDA<sup>1</sup> and KIYOFUMI FURUSAWA<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Matsumoto Dental University

<sup>2</sup>Department of Oral Pathology, Matsumoto Dental University

### Summary

We reported a rare case of cemento-ossifying fibroma on the right jaw of an elderly person. A 66-year-old woman complained of gingival swelling in the right first and second small molar region. Radiographic examinations demonstrated a relatively well-demarcated radiolucent lesion that was continuous with the roots of the teeth and, contained small radiopaque spots. We enucleated the lesion under general anesthesia, and the final diagnosis was cemento-ossifying fibroma. We further discuss the mechanism underlying the development of this tumor in an elderly person.

### 緒 言

セメント質骨形成線維腫 (cemento-ossifying fibroma) は, セメント質と骨を形成する線維性の実質からなる良性腫瘍で<sup>21)</sup>, 発生学的には, 歯周組織に関連した間葉性細胞に由来する<sup>8)</sup>. 好発年齢は20~30歳代と比較的若く, 高齢者の報告例は極めて少ない<sup>21)</sup>.

今回, 我々は66歳女性の右側下顎小臼歯部に発生したセメント質骨形成線維腫の一例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する.

### 症 例

患者: 66歳, 女性.

初診: 2004年4月12日

主訴: 右側下顎犬歯から第一小臼歯部頬側歯肉の腫脹.

既往歴・家族歴: 特記すべき事項なし.

現病歴: 数年前から右側下顎小臼歯部頬側歯肉の膨隆に気づくも無痛性のため放置していた. 1年ほど前より, 同部の増大傾向を認めたため某歯科医院を受診したところ, 精査加療を勧められ, 2004年4月12日に松本歯科大学口腔外科を受診した.

## 現症

全身所見: 体格は中等度にて, 栄養状態も良好で, 特記すべき事項はなかった.

顔貌所見: 顔貌は左右対称であり, 所属リンパ節の異常所見は見られなかった.

口腔内所見: 右側下顎の前歯部から小白歯部の頬側歯肉に, 直径約20 mmの半球状で無痛性の膨隆が認められた (Fig. 1). 膨隆は弾性硬で被覆粘膜は健常色を呈していた. 右側下顎側切歯・犬歯はともに生活歯で, 右側下顎第二小白歯は欠損していた. 右側下顎第一小白歯は失活歯で根管治療がされており, 歯冠修復がされていた.

X線所見: パノラマX線写真で右側下顎犬歯から第一小白歯部にかけて比較的境界明瞭で, 小石灰化物様の不透過像を含む類円形の嚢胞様透過像を認めた (Fig. 2). 透過像は歯根端を含むものの, 歯根の吸収像は認められなかった.

CT所見: 右側下顎犬歯から第一小白歯部にかけての頬側皮質骨は非薄化し, 病変部のCT値は57.97で軟組織と近似値を示した. また, 内部には high density を示す小石灰化物様が散在していた (Fig. 3).



Fig. 1: 初診時口腔内写真; 右側下顎小白歯部の頬側歯肉に半球状の骨様硬の膨隆を認める.

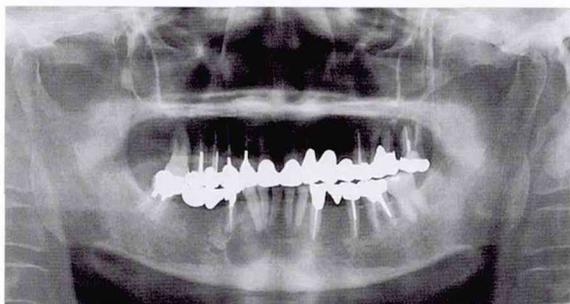


Fig. 2: 初診時パノラマX線写真; 右側下顎犬歯から第一小白歯にかけて境界明瞭で小石灰化物を含む類円形の透過像を認める.

臨床検査所見: 血液一般, 生化学, 尿検査において異常値は認めなかった.

臨床診断: 顎骨内良性腫瘍

処置および経過: 2004年7月7日に全身麻酔下で腫瘍摘出術を行った. 粘膜骨膜弁を剥離したところ菲薄した皮質骨が認められ, それを除去した後に腫瘍を一塊として摘出した. 腫瘍と隣接した骨



Fig. 3: 初診時CT写真; 右側下顎犬歯から第一小白歯相当部の頬側皮質骨の膨隆と非薄化を認める.

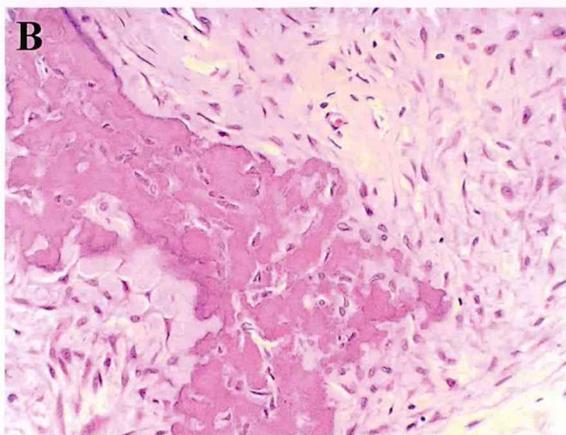
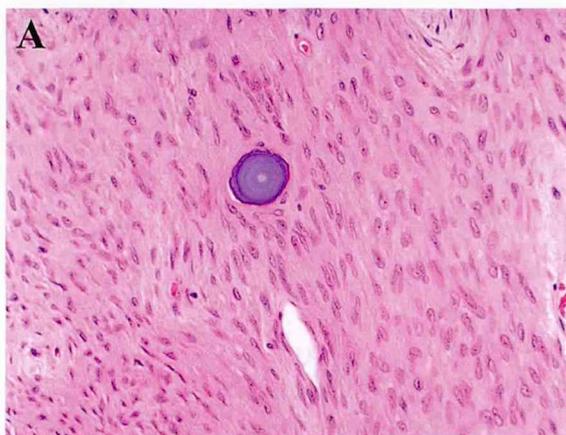


Fig. 4: 病理組織像 (H-E 染色, 倍率×100); 線維性組織の中にセメント質(A), および骨(B)の形成を認める.

面は粗造だったため、骨バーにて一層削除し、創を閉鎖縫合した。術後1年9か月経過したが現在のところ再発傾向を認めていない。

病理組織学的所見（ヘマトキシリンエオシン染色：H-E染色）：組織学的には、主として多量の紡錘形細胞と膠原線維の不規則な増殖がみられた。その中に、大小の類球形あるいは不規則なセメント質様硬組織と梁状の類骨、ないし層板構造を示す骨組織が存在していた。セメント質様硬組織は好塩基性に染まり、封入細胞が少なく、原生セメント質に類似していた。骨梁辺縁に位置する骨芽細胞は扁平型であり、異型性はみられなかった (Fig. 4 A, B)。

病理組織学的診断：セメント質骨形成線維腫

## 考 察

顎骨に発症するセメント質骨形成線維腫の分類は、これまでに幾多の変遷を経ている。以前は化骨性線維腫とセメント質形成線維腫に分類されていたが、セメント質に類似した硬組織が、顎骨以外の部位での骨病変にも認められること、顎骨内においてセメント質と骨とは一連のものであり、両者を明確に区別することが難しい症例もあること<sup>10)</sup>から、1992年のWHOの分類において、セメント質骨形成線維腫として一つの疾患に統合改変され<sup>13)</sup>、さらに、2005年の新分類では、セメント質骨形成線維腫は骨形成性線維腫の同義語として取り扱われるようになった<sup>29)</sup>。しかし、自験例についてはセメント質様硬組織と骨様硬組織が明確であったため、診断はセメント質骨形成線維腫とした。本疾患の好発年齢は20～30歳で、女性に多くみられるとされる<sup>21)</sup>。また、報告例は比較的少なく、我々の渉猟しえた範囲では40症例<sup>1-18, 22-27)</sup>のみで、平均年齢は32.4歳、60歳以上の報告例は

1例であった (表1)。本疾患は歯小囊由来歯周靱帯の前駆細胞から発生するため、歯のある部位にしか発症しないとされる<sup>21)</sup>。自験例と渉猟したすべて症例においても、歯に隣接して病変が認められ、このことが、喪失歯数が大幅に増加する高齢者<sup>30)</sup>での報告が少ない理由の一つと考えられた。

青年期以前にみられる本疾患は、比較的発育の速いものがある<sup>8)</sup>が、中年期以降の症例では、ほとんどが緩慢な発育増殖を示す<sup>17)</sup>とされ、自験例でも極めて緩慢な増殖傾向を示していた。

今後、残存歯を数多く有する高齢者の診療機会が増えるに従って、無自覚・無症状に発症した本疾患に遭遇する機会も増すことが予想され、高齢者の診療に際しても本疾患に留意をする必要であると考えられた。

## 文 献

- 1) 山田源一郎, 佐野雄三, 伊藤栄二, 鹿毛俊孝, 亀山嘉光, 千野武広 (1975) Cemento-ossifying fibroma の1症例. 日口外誌 **21** : 498-502.
- 2) 大西正信, 日下雅裕, 古賀賢三郎, 根本辰朗, 岸本 源, 阿部本晴, 谷田修三, 麻生昌邦, 山田祐敬 (1980) セメント質形成性線維腫の2症例. 日口外誌 **26** : 1235-43.
- 3) 川上敏行, 林 俊子, 中村千仁, 阿部伸雄, 鹿毛俊孝, 亀山嘉光, 千野武広 (1978) Cemento-ossifying fibroma の2症例. 松本歯学 **4** : 159-63.
- 4) 平田 康, 岩城 博, 天笠光雄, 和田森匡, 鷯澤成一, 磯部昌継, 長岡俊哉, 山田隆文, 坂本啓, 高木 実 (1999) セメント質骨形成線維腫の臨床病理学的検討. 日口外誌 **45** : 823-5.
- 5) 赤間 淳, 今村英夫, 井原功一郎, 角田隆規, 豊田純一郎, 後藤昌昭, 香月 武 (1999) セメント質骨形成線維腫3例の臨床病理学的検討. 口腔腫瘍 **11** : 23-8.
- 6) Ando T, Sato Y and Hasegawa Y (2000) Cement-ossifying fibroma of the mandible : A case report and review of the literature in Japan. Hosp Dent (Tokyo) **12** : 35-8.
- 7) Hamner JE, Lightbody PM, Ketcham AS, and Swerdlow H (1968) Cemento-ossifying fibroma of the maxilla. Oral Surg Oral Med Oral Pathol **26** : 579-87.
- 8) 佐藤 徹, 石橋克禮 (1993) 顎骨病変 セメント質-骨形成線維腫. 歯科ジャーナル **37** : 841-3.
- 9) 朱 恩新, 高木 実 (1993) 顎骨の Fibro-osse-

表1

年齢	男	女
0～9	0	0
10～19	5	3
20～29	0	9
30～39	1	5
40～49	2	9
50～59	1	4
60～69	0	0
70～	0	1

- ous lesions の病理. 歯科ジャーナル **37**: 797-803.
- 10) 山崎 正, 吉沢邦一, 田中 寿, 倉科憲治, 武田 進, 小谷 朗, 枝 重夫 (1982) 顎骨の硬組織形成線維腫に関する病理学的考察. 日口外誌 **28**: 1097-105.
  - 11) Small IA, and Goodman PA (1973) Giant cemento-ossifying fibroma of the maxilla: report of case and discussion. *J Oral Surg* **31**: 113-9.
  - 12) Kennett S and Curran JB (1972) Giant cemento-ossifying fibroma. Report of case. *J Oral Surg* **30**: 513-6.
  - 13) Kramer IRH and Pindborg JJ, M (1992) Histological typing of odontogenic tumours: WHO international histological classification of tumours. 2nd ed. Springer-Verlag, Berlin, 27-31.
  - 14) 山下佳雄, 式守道夫, 後藤昌昭 (2004) 上顎骨に発生したセメント質骨形成線維腫を契機として発見された原発性副甲状腺機能亢進症の1例. 日口診誌 **17**: 241-5.
  - 15) 荒谷恭史, 市川健司, 仁井内徹夫, 宮内 忍, 吉賀浩二, 高田和彰 (1994) 下顎骨下縁まで進展したセメント質骨形成線維腫の2症例とその顎骨保存処置. 口腔腫瘍 **6**: 50-4.
  - 16) 坂東泰博, 中西宏彰, 後藤裕士, 長山 勝 (1995) 下顎に生じた嚢胞性セメント質・骨形成線維腫の1例. 日口外誌 **41**: 163-5.
  - 17) 伊藤雅樹, 林 升, 末原佐枝, 相沢 隆, 大森桂二, 江藤ゆかり, 林 透, 日高圭太郎, 大関悟, 本田武司 (2004) 下顎臼歯部にみられたセメント質骨形成線維腫の2例. 福岡歯大誌 **30**: 91-6.
  - 18) 松田由紀子, 白野隆史, 石井輝彦, 山野井弘充, 高山泰男, 岩成進吉, 遠山良成, 田中 博, 浅野正岳, 小宮山一雄, 茂呂 周 (1989) 化骨性線維腫の2例. 日口外誌 **35**: 1462-8.
  - 19) 高木 實 (1998) 口腔病理アトラス, 第1版, 231, 文光堂, 東京.
  - 20) 石川悟朗監修 (1982) 口腔病理学II, 改訂版, 497-500, 546-9, 永末書店, 京都.
  - 21) 宮崎 正, 松矢篤三, 白砂兼光 (2000) 口腔外科学, 第2版, 249-50. 医歯薬出版, 東京.
  - 22) 森田章介, 中嶋正博, 橋本 武, 谷本啓三, 嶋森純史, 長野紀也, 岡野博郎 (1982) 下顎に発生したセメント質形成線維腫の3症例. 日口外誌 **28**: 2036-42.
  - 23) 坂東泰博, 中西宏彰, 後藤裕士, 長山 勝 (1995) 下顎に生じた嚢胞性セメント質・骨形成線維腫の1例. 日口外誌 **41**: 163-5.
  - 24) 荒木正弘, 佐野和生, 井口次夫, 藤田修一, 高橋 弘 (1987) 嚢胞を思わせた下顎骨化骨性線維腫の1例. 日口外誌 **33**: 1622-7.
  - 25) 岡村和彦, 谷口邦久, 林 宗史, 船越知行, 門司達也, 前田顕之, 下田恒久, 本田武司 (1999) 大きな嚢胞形成を伴うセメント質骨形成線維腫の1例: 移植骨における再発例. 福岡歯大誌 **26**: 33-40.
  - 26) 岩佐俊明, 堀越 勝, 名倉英明, 曾田忠雄, 伊藤秀夫 (1977) 多数の小空洞形成がみられた下顎のセメント質形成線維腫の1例. 日口外誌 **23**: 848-52.
  - 27) 松本堅太郎, 桧垣一夫, 谷口邦久, 岡村和彦, 田中 守, 柴田博之, 若江秀敏, 富岡徳也 (1997) 強い侵襲性が示唆された下顎骨セメント質-骨形成性線維腫の1例. 口腔腫瘍 **9**: 70-5.
  - 28) 二階宏昌 (2001) WHO分類に基づく口腔腫瘍の診断(その4) セメント質-骨形成性線維腫ならびに非腫瘍性顎骨病変. *Hosp Dent (Tokyo)* **13**: 15-20.
  - 29) Leon B, John W E, Peter R and Davit S (2005) World health organization classification of tumours. 319-20. IARC Lyon.
  - 30) 平成11年歯科疾患実態調査報告(厚生労働省医務局調査). 日本歯科医師会